

エコトーンを評価軸とした景観評価に関する研究 —富士山を主題要素とした自然景観を対象に—

田中 章 研究室
1561022 大畑 聖一郎

1. 研究背景・目的

2004年6月には「景観緑三法」が公布され、良好な景観の形成に向けた規制も本格化し(大石ら, 2007)、これまでの景観に関する研究も具体的整備手法の検討の観点で多くの景観解析手法を提案していることから、定量的かつ一定の基準で景観の特徴を把握する意味で成果を上げている(姫野ら, 2003)。一方で、どのような方向性で景観を整備していくべきかを探る研究が十分になされておらず、これらの景観の解析手法が生かされているとは言えない現状にある(姫野ら, 2003)。今後、視覚的な「景観」ととどまらず、その土地の生態系をも考慮した景観評価・保全の方向性(田中, 2008)を探る必要がある。

水の存在が景観評価を上昇させると結論付けたズーベの水理論(進士, 2005)と景観を自身の生息地としての適否によって直感的に捉えているという生息地理論(アップルトン, 1996)は、水が人を含む生物に必要不可欠である点で整合しており(田中, 2008)、生物多様性および生産性の高さは人の生息地としても適合性が高いと考えられる。本研究では、これまで景観評価軸としては検討されてこなかったが、生物多様性を担保する特殊な環境であり保全の重要性が認められつつある水辺エコトーンを対象に、景観の選好性にどのように影響しているのかを明らかにし、景観評価の軸としての適切さを検討する事で、景観保全の方向性を決定するための基礎的な知見を得る事を目的とする。

2. 研究方法

①景観選好調査(一次調査)…15対の富士山を主題とした景観写真(全30枚;富士山の全方位からの眺望となるよう配慮)を対象に「どちらがより好ましいか」と質問し、選好されやすい景観の傾向を把握した。

②二次調査…評価グリッド法を応用して、12枚の自然景観(主題要素の有無・水の有無を組み合わせ、構図を考慮した各3枚全12枚)に対する好印象および悪印象の定性評価構造を明らかにし、形容詞対を抽出した。

3. 研究結果

3-1. 一次調査

富士山を主題要素にした自然景観30枚(図1)を2枚1組にし、全15組としたものを対象に、77人に景観の比較選好調査を実施した。各組の選択

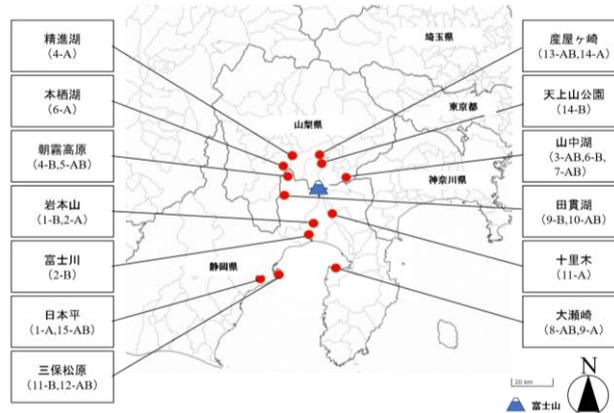


図1 景観選好調査(一次調査)で対象とした富士山の眺望点

割合を算出し(図2)、各組で他方より選好される傾向にあった景観写真は4-A, 11-A, 12-B及び15-Bであった(図3)。

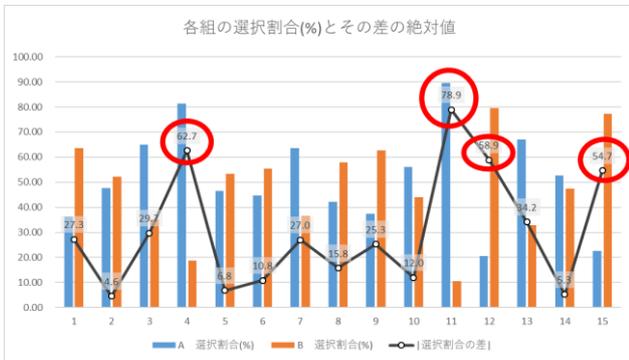


図2 各組の選択割合とその差の絶対値

【4-A】近景はほぼ同比で構図も同様だが近景のカバータイプが相違点で、81.33%の回答が4-Aを好ましいと評価し、近景が水域の景観の方が陸域の景観より選好された。【11-A】Aは近景にそば畑が広がる十里木の景観で、Bは近景が海岸の裸地で中央右側に海、左側に松林が映る三保松原の景観である。緑視率の高さや、主題要素の面積比の高さが選好要因になっていると示唆された。

【12-B】Aは近景を海が占め、Bでは海岸線が近景に含まれている景観で、水辺エコトーンの高さ、奥行き感が選好要因になったと考えられる。

【15-B】Aは高い緑被率だが中景の水域と遠景の富士山の被写面積比は小さく、Bでは中景右側の水域、遠景の富士山が共にAよりも大きな被写面積を占めた。近景は市街景観で構成されているが

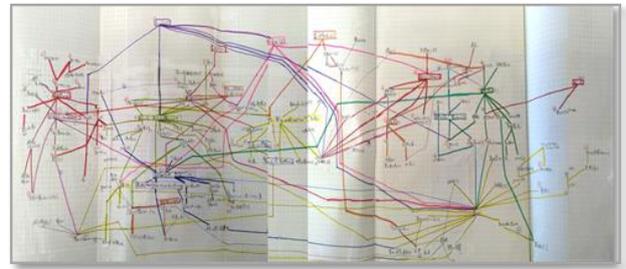


図4 好印象の定性評価構造

これは景観の評価構造に関する既往研究の仮定と整合する。また、富士山の評価条件として「近景との連続性」や要素の組合せに関する項目が抽出され、遠景の富士山を見つつその手前を評価している事が明らかになった。「多様な要素/水辺の存在/緑の存在」は「自然感/自分がその場にいる連想/生き物の存在の連想」の評価条件で、水辺や緑のある多様な景観が自然性を感じさせ、自身がその場にいる連想をしていると考えられる。

4. まとめ・考察

主題要素に関しては、その面積比や境界の視認性が好印象の一つの選好要因となっているが、水や緑といった要素の存在・状態（水面が輝いている等）が評価条件であることが明らかになった。景観の認知構造に関しては、景観要素を知覚するとそれを評価し、その場の印象（躍動感、奥行き感等）を経て、総合的な評価に至っていることが確認された。複数の生態系の境界となる水辺エコトーンは多様な要素の存在を感じさせ、自然的な印象を与えることで、落ち着く景観と認識させて総合的に好評価になると考えられる。このエコトーンを景観評価軸とすることで、視覚的な評価のみならず面的に景観が評価され、景観評価から生態系を担保する手段となる。

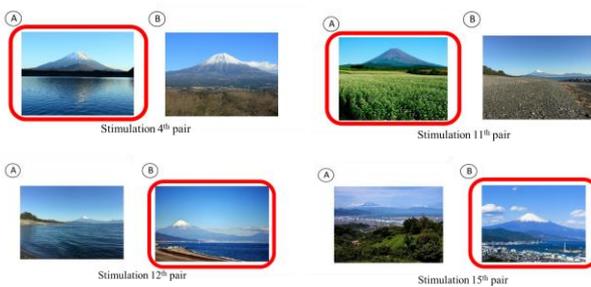


図3 選択割合の差が大きかった景観

主題要素と水域の面積比の大きさが選好性に影響していると考えられる。

3-2. 二次調査

集計より評価構造の上部には「美しい」「印象的」「自分がいる想像ができる」等のより抽象的・総合的な評価項目が複数収束し、下部には「明るい」「奥行き感」「水の輝き」「晴れている」「富士山」等のより具体的な要素の評価項目が抽出された。

5. 引用文献

大石洋之, 村川三郎, 西名大作. (2007). 被験者の撮影写真における選好景観特性の分析. 日本建築学会環境系論文集, 72(611), 75-82.

姫野由香, 佐藤誠治, 小林祐司, 金キョン希. (2003). 観光資源が写された景観画像の構図解析手法. 日本建築学会計画系論文集, 68(569), 139-145.

田中章 (2008) これからの景観アセスメント. 156-159, 日本環境アセスメント協会編, エコロジストの時間. 東海大学出版会, 神奈川県, 193pp.

ジェイ・アップルトン (1996) 風景の経験. 法政大学出版局, 東京都, 381pp.

進士五十八 (2005) 日本の庭園. 中央公論新社, 東京都, 292pp.